

東京学生映画祭

16時30分より始まったアニメーション部門では、それぞれ魅せ方の異なる6作品が出品された。上映された作品はどれも5分から20分程度の短編アニメーションである。それぞれが異なる手法で制作されているため、見ていて飽きることがない。グラフィックアニメやクレイアニメ、有名な絵画を用いた切り絵のアニメといった特殊なものなど、各手法に監督のこだわりが表れている。音声もまたさまざまで、セリフが中国語



今年の5月27日から29日にかけて、下北沢駅から徒歩5分の北沢タウンホールにて、第28回東京学生映画祭が開催された。学生映画祭とは自主制作映画の1つで、大学の映画サークルや映画専門学校などの学生など、アマチュアの手によって制作されているものである。一般的な商業映画とは違い、学生らしい自由な表現をすることができるとが特徴である。27日はアニメーション部門、28日はアニメーション部門の上映が行われた。映画の自主制作を経験した後、商業映画の舞台で活躍する監督も多く、今回の応募者の中からも将来活躍する監督が現れるかもしれない。

の作品や、そもそもセリフがなく、ハミングのみの作品もある。中には大学で学んだサウンドアートを活かしているものもあった。バラエティに富んだ6作品の中から、今回グランプリに選ばれたのは、見里朝希監督の『あたしだけをみて』だ。ガールフレンドの魅力や付き合い始めた頃のドキドキした気持ちをい



▲『あたしだけをみて』に登場したフェルト人形

つの間にか忘れて日々を送る主人公に起こる出来事が描かれている。怖い顔を作ろうとしたのが始まりだというこの作品は、フェルト人形とフェルトを布に展開した平面的なアニメーションを用いて作られている。トークセッションでは、1秒24コマを徹底した滑らかなアニメーション、さまざまな人からのアドバイスを受けて作り込まれたストーリー、そして人形の見せる豊かな表情が魅力として語られた。

グランプリを獲得した『あたしだけをみて』、および準グランプリを獲得した『のんねむくん』は、「東京

品と実写部門の8作品なのである。それぞれの部門ではゲスト審査員によりグランプリと準グランプリが、観客の投票により観客賞が、実写部門ではさらに役者賞が選ばれた。ゲスト審査員は、アニメーション部門ではアニメ・特撮研究家であり、明治大学大学院客員教授の氷川竜介氏、イラストレーターでありアニメーション作家の植草航氏、アニメーション監督の新井陽次郎氏、実写部門では、映画監督の清水崇氏、山戸結希氏、映画プロデューサーの池田史嗣氏であった。3日目の映画祭終了後には、ゲスト審査員、今回出品した作品の監督、そして観客誰もが参加できる立食パーティーが行われた。

今年はこれまでとは異なり、募集の対象となる学校を首都圏近郊から全国に拡大し、アニメーション部門と実写部門合わせて約160作品が応募された。それらの1次審査は全て東京学生映画祭の審査員によって評価項目が設けられており、厳密に選考される。2次審査では過去の委員や過去の受賞者も選考に加わる。こうした厳しい審査を勝ち抜いたのが今回のアニメ部門の6作

実写部門は今年より募集地域を全国に広げ、集まった100作品以上の中から珠玉の8作品が出品された。2日間に渡って上映されたそれぞれの映画はどれも50分から80分程度の長さであった。アニメーション部門に比べて上映時間が長いので、作品の世界に深く入り込むことができる。制作期間は6カ月から1年とさまざま。制作費は1万5千円から300万円まであり、空撮を取り入れている作品もあった。作品のジャンルは青春劇からコメディ、サスペンスなど多岐に渡る。その中から見事グランプリを勝ち取ったのは、村上由紀監督の『お姉ちゃん』であった。準グランプリには井澤彩監督の『溶ける』、観客賞には

竹中真人監督の『虎穴にイラズンバ』が選ばれた。受賞作品の発表後の講評にて、清水監督は「3人の意見が一致した優勝作品だった」とコメントした。主人公の那津は小さな島で退屈な日々を過ごしている。ある日、姉の伊澄が島へ帰ってきた。久々の邂逅で彼女は姉の存在の大きさを改めて実感する。本作は「自分の小ささに立ち向かっていく少女」を描いたという。姉に鯨を重ね合わせることで、姉を妹とつて手の届かない卓越した神聖なる存在」として演出していた。本作で主人公の少女、那津を熱演した田中志朋さんは、その演技から役者賞を受賞した。

『お姉ちゃん』は上映後のトークセッションでは、本作品カメラマンの西井千裕さんと主演の田中志朋さんが登壇し、ゲスト審査員との対談を行った。撮影中最も苦労させられたトークセッションの様子

今回は、第28回東京学生映画祭の代表を務めた日本女子大学3年の菅原浩さん、広報部で聖心女子大学3年の村田愛理さんの2人から、東京学生映画祭について話を聞いた。

その後も、東京学生映画祭はどのような活動を行っているのだろうか。東京学生映画祭は進行部、上映部、広報部という3つの部門に分かれる。進行部は、ゲスト審査員とMCの募集を行うほか、当日は東京学生映画祭の運営を円滑にするためのスタッフとして動くことが主な活動だ。上映部は、応募された作品の管理、映画の上映を行う。上映に必要な機材を協賛企業から借り、音響や照明など設備を整えることも上映部の仕事である。広報部は、TwitterやFacebookなどのSNSを通して作品の募集を呼びかけたり、チラシやパンフレットなどの作成を行ったりしている。また、協賛企業を探すのも広報部の活動である。東京学生映画祭は企画や運営のほとんどを学生だけで行っているのだ。

今回の委員らが重視したことは、映画が好きな人たちが出会い、これからの活動に活かせる場を作ることであつたそう。そのことが特に表れているのは東京学生映画祭最終日、授賞式の後に行われたレセプションパーティーである。これはゲスト審査員や学生監督の他に一般の観客も参加できた。昨年度までは事前に大きな宣伝はしておらず、来場者の中にもその存在を知らなかったという人が多くいたそう。一方、今回はレセプションパーティーの存在を大きく宣伝した。SNSで繰り返し投稿したほか、代表が行った閉会の挨拶で

もその存在が強調された。その結果、パーティーは例年より多くの参加者で賑わい、多くの人と人が新たに出会い、交流を深めている様子であった。

▲最終日の集合写真



協力しながら創り上げていく水と光の祭典である。川辺に巨大な2枚のスクリーンを立て、夜に映画を鑑賞する非日常の劇場空間を演出する。上映する作品は今回の東京学生映画祭当日に上映され、アニメーション部門でグランプリを受賞した『あたしだけをみて』と実写部門で観客賞を受賞した『虎穴にイラズンバ』である。これら2作品はシアターナイトの委員により選出された。シアターナイトでは本学学生の手により夜の川辺に幻想的な空間が創り出されていることだろう。友人や恋人などを誘って行ってみるとよいのではない。

「のんねむくん」は、「東京

ことは天候だったそう。台風の影響があり、シーンの天気を変更せざるを得なかったという。

今回で28回目を迎えた、東京学生映画祭・実写部門。過去の出品者の中には現在の日本映画の第一線で活躍している監督や映像クリエイターが数多く存在する。ゲスト審査員を務めた山戸結希氏もその1人である。彼女が独学で制作したという、『あの娘が海辺で踊ってる』は、第24回東京学生映画祭で審査員特別賞を受賞した。その他にも、『殿、利息でござる!』の中山義洋氏、『共喰い』の青山真治氏、『君に届け』の熊澤尚人氏、『ちはやぶ

る』の小泉徳宏氏など、さまざまなジャンルにわたる映画関係者を輩出してきた。いまや東京学生映画祭は日本映画界の登竜門になりつつある。今回の第28回だけではなく、第29回、第30回と続いていく東京学生映画祭から、また新たな映画界のスターが現れてくることを願ってやまない。

東京学生映画祭と利根運河シアターナイトの共同企画として、8月27日に千葉県流山市にある運河水辺公園にてシアターナイトが実施される。シアターナイトは本学理工学部建築学科の学生が中心となって運営している団体だ。地域の人と

協力しながら創り上げていく水と光の祭典である。川辺に巨大な2枚のスクリーンを立て、夜に映画を鑑賞する非日常の劇場空間を演出する。上映する作品は今回の東京学生映画祭当日に上映され、アニメーション部門でグランプリを受賞した『あたしだけをみて』と実写部門で観客賞を受賞した『虎穴にイラズンバ』である。これら2作品はシアターナイトの委員により選出された。シアターナイトでは本学学生の手により夜の川辺に幻想的な空間が創り出されていることだろう。友人や恋人などを誘って行ってみるとよいのではない。

▲最終日の集合写真



東京学生映画祭の準備は7月から始まり、下北沢で行われる週1回のミーティングを中心に進められていく。企画委員となる大半の学生は、映画に関わる活動は初めてだそう。少しでも興味があるならば、日曜日の夕方に一度、下北沢を訪れてみるのもいいかもしれない。

▲最終日の集合写真